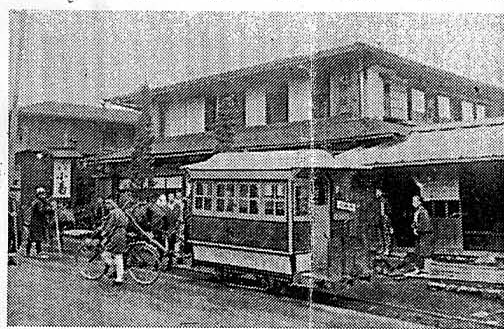


やまなし 文学散歩

◇14

明治四十五年四月一日かた。その翌は、山本喜馨
ら三日にかけて、芥川龍之介のほがきに詳しい。
介は富士の裾野を散策し、前回取り上げた書簡も山本
をかへ起したあきかてて



龍之介が宿泊した富士吉田市下吉田の宿「小菊」

あてたが、彼は龍之介の中学校以来の親友で、龍之介の妻となった嫁本木の叔父に当たる人物だ。

旅人ふじつへんはあはてして道はのけり大空の下の

今日朝八時東京発大月下車七里の道を吉田に参り候、空雨れて木二の雪ははやかに白く、宿の名を小菊、寒気つよ、炭火をあかへ起したあきかててをかき候

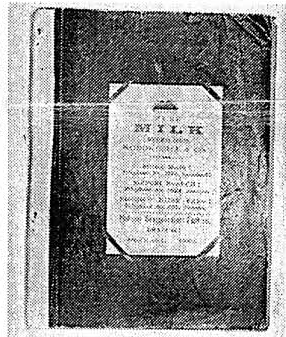
三百村のはがきには三首の短歌が添えられている。

一しきり花白蘭の風にほふ木松の小屋に鶯をきく
うす青き初春の空をほの白

芥川龍之介

③

牛乳の効用を広めるために龍之介の妻父新原敏三が作成した「フレットの裏表紙」



う雪の山見を野は花さき、鶯の声の流るゝ水色の空にけむり樺の若芽は

あるいは、成人になった記念の旅であったのかも知れない。

文学館所蔵の芥川資料の

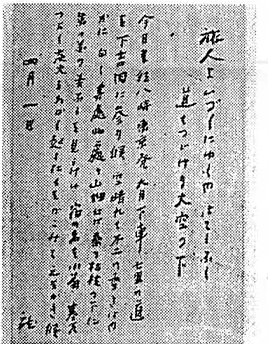
引き継がれた父の牛乳店

富士裾野の風景を叙した歌である。龍之介は当時二十歳になったばかりで、文面からして、この旅は一人旅であったと推測される。

中には、他にも山梨のごとに触れた文章がある。「槍ヶ岳紀行」と題されたクーレに、槍ヶ岳に行く途中、中央線の車窓から見た山梨の風景の描写がある。

汽車が甲府をはなれると再び上りになる。窓から首

富士の裾野を散策した際の山本あて書簡
(明治43年10月14日付吉田信子さん所蔵)



を出して眺めると、草の間
に女郎の弱々しいのや無
子のうす紅なや桔梗の紫
なやらが所々にさいている

龍之介はしばしば中央線沿いに旅をしながら、妻父新原敏三の経営する牛乳店「耕牧舎」の牧場が新宿にあり、芥川家自身も明治四十二年から大正三年田

る。その間に稲田が青々と
風をよいで畑には藍花が
せつせと労働をつとめてゐる。

1 猿橋から始まって、大月、甲府、日野春と停車場を過ぎるごとに姿容する異観を丹念に書いている。

場に向かっていた。龍之介の

妻父新原敏三も仙石原で養畜係をしていた。文獻では確かめられないが、二人は同僚であった可能性が高い。やがて敏三は東京の支店の責任者となり、明治三十八年には正式に経営権を取得し、芝新製菓店を耕牧舎本店と称した。一方、落合熊次郎も次女から牛乳を譲り受け猿橋に支店を構えることになり、明治三十七年、本家の仙石原の牧場の解散とともに独立した。つまりもともと猿橋にあった耕牧舎が、東や山梨で引き継がれていったのだ。

「耕牧舎落合乳店」は戦後、大正牛乳会社の系列に入ったのを機に、耕牧舎の看板は外されたが、箱根の「三山」を模したマークは長く使われていたという。その落合乳店での一月、開業二一年目、閉店

1 現在夫夫の落合正三さんにはかたがた、百年間は店を続けようと思ってきたが、耕牧舎の長い歴史もいに聞かれることになった。この山梨でも意外なことに、耕牧舎をめる物語があったのである。

(K)